



総合プロデューサー:
藪本 雄登



アーティストック・ディレクター:
宮津 大輔



籠もる牟婁
ひらく紀南

い海岸線と良質な木材は、古代から高い造船技術を発達させ、物資輸送や水軍の拠点として、歴史上大きな役割を果たしている。堺で最初に利用された船は紀州富田の船であり、かつて富田、田辺、日高などは「港」としての起点を担い、経済文化の中心地でもあったのだ。

残念ながら今や忘れ去られてしまった「籠もる牟婁 ひらく紀南」という地域の特性。今年初めて開催される「紀南アートウィーク」では、現代アートを活用することで紀南⇨牟婁の歴史的・文化的資産を現代に蘇らせようとしている。発起人は、タイやカンボジアなど世界20拠点で展開する国際法律事務所共同創業者である藪本雄登。アジアを中心にアーティスト、キュレーターや展示会実施支援等の助成をおこなうとともに、動画作品を中心にコレクションする「アウラ現代芸術振興財団」代表でもある。「紀南アートウィーク2021」総合プロデューサーを務める彼が、アーティストック・ディレクターに指名した

のは、横浜美術大学学長・森美術館理事の宮津大輔だ。洋の東西を問わず、近現代の芸術史や思想史などに関する造詣が深く、美術保存や修復に関する専門的な知見を持つ宮津を抜擢したことは、まさに適任だと言える。さらに彼は世界を代表するコレクターの一人であり、特にアジア地域の映像作品をその黎明期からコレクションしていることから、それらのアーティストたちと非常に深い関係性を築いてきた。「紀南アートウィーク」は行政主導ではなく、民間の民間によるプロジェクトであるためコスト面をはじめ制約も多い。その点、グローバルに活躍する作家たちの信頼をすでに得ている宮津がアーティストック・ディレクターを務めていることは、トップアーティストを招聘する際にも有利に働くだろう。藪本は宮津に期待する点を「今回の紀南アートウィークの趣旨に基づいて、真にグローバルなアーティストや人々と紀南地域との接点を導き出して頂けることを期待しております。」と語っている。

紀南アートウィーク 2021

むろ きなん
-籠もる牟婁 ひらく紀南-

11月18日(木) ▶ 11月28日(日)



Photo by Megumi Ueno (アトリエ・ちぎゅうの道)

高い山々の連なる紀伊山地は日本有数の多雨地帯。豊かな雨水が深い森林を育てている。

世

界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」

の大部分を成す和歌山県南部の紀南地域は、神々が鎮まる特別な場所として人々に崇められてきた。ここに生まれたのが、「吉野・大峯」「熊野三山」「高野山」と、起源や内容が異なる三つの「山岳霊場」。さらにはそれぞれへと至る熊野古道という「参詣道」もでき、全国各地から多くの人々が訪れるエリアとなった。こうして日本の宗教・文化の発展と交流に大きな影響を及ぼしたのである。

紀南は、熊野、牟婁と呼ばれるエリアとほぼ重なる。「牟婁」という地名の由来は「籠もる」「隠る」「神々の室」など。豊かな山林資源の中に籠り、内面的な世界を追求することに秀でた歴史的な特色を有している。高野山の信仰や熊野古道の宗教観は、社会的地位や、信仰、性別等を問わない日本における寛容性と多様性の源泉。南方熊楠や長沢芦雪といった奇想天外な人物を輩出し、魅了してきた。一方、紀南の特色は「開放性」。かつて黒潮とともに移民文化を醸成してきた。長

業などの産業従事者、その他様々な魅力あふれる人たちとの対談を通して紀南の未来を考える対談、教育機関や博物館等との共同ワークショップだ。すでに「紀南ケミストリーセッション」と名付けたオンライントークセッションや数本による中高生向けのワークショップが好評のうちを実施され、11月の開催に向けた紀南地域での機運は高まっている。

和歌山県からは第二次世界大戦前に約3万1千人、戦後は約2千人が海外へ移住した。これは広島、沖縄、熊本、山口、福岡に次ぐ6番目の数字であり、紀南地域をはじめとする和歌山の人々の先進性と国際性を示している。「紀南アートウィーク2021」でも、国内だけでなく海外に向けてもこのプロジェクトの情報を発信するため、公式サイトやSNSなどは全て日英2言語で表記されるのだ。

実は「紀南アートウィーク」の目的とは、紀南の価値を全世界に輸出することにある。その趣旨に叶う事業として考えられたのが、持続可能な小さく地道な取り組み

みでありながら、最大効果が狙えるアートを核としたプロジェクト。数本はこう語る。「これまで開催されてきた多くの芸術祭のように、来場者が何人いて、それに伴う経済波及効果がいくらかよりも、世界に価値を輸出できる産業や事業者を1%でも生み出すことの方が重要ではないかと考えています。あくまで芸術祭という形態で始めますが、それがベストかどうかを常に疑問を持ち、時と場合によって手段を再検討しながら、10か年計画で活動を積み重ねていきたいと思っています。」

「紀南アートウィーク」とは、縄文文化やアニミズムなど世界に輸出可能な普遍的な思想、哲学がある紀南地域だからこそ始まった実証実験だと言えるかもしれない。アートが持つ広さや深さを、紀南ならではの梅やミカンなどの農業資源、味噌や醤油といった食文化などと結び付け、世界に受け入れられる産業を生み出す——それを実現するためのデータ収集等の場もあるのだ。アートを通じた大きなこの実験に今後も注目していきたい。

+information

紀南アートウィーク 2021

会 期：11月18日(木)～11月28日(日)

会 場：和歌山県紀南地域 田辺市・白浜町内各所

観覧料：無料

※会場によって別途入場料が必要な場合あり

主 催：紀南アートウィーク実行委員会

共 催：株式会社南紀白浜エアポート

後 援：和歌山県

問合せ：紀南アートウィーク事務局 info@kinan-art.jp

U R L：https://kinan-art.jp



白浜エリア展示会場



南紀白浜空港



アドベンチャーワールド



川久ミュージアム(ホテル川久)

田辺エリア展示会場



高山寺



南方熊顕彰館



田辺駅前商店街

【展示決定アーティスト】アビチャッポン・ウィーラセータクン、ホー・ツーニェン、呉長蕃、前田耕平、河野愛 ほか

「紀南アートウィーク2021」では、紀南地域のうち田辺市、白浜町の様々な場所や施設にグローバルな現代アーティストの作品が展示される。初年度となる今回はアーティストリック・ディレクターを務める宮津のコレクション、特に映像作品が中心となる予定。しかも美術館などの一般的な展示施設を使うだけでなく、南紀白浜空港や高山寺、アドベンチャーワールドといった一見美術とは関係のなさそうな施設をも舞台に、会場ごとの歴史や背景などを深く掘り下げて、その場にふさわしいアーティスト、作品が展示されることになる。グローバルな映像作品以外にも、紀南地方出身、もしくは紀南地域にゆかりのある新進気鋭の作家を1〜2組ほど招聘する計画だ。

作品展示と並行して、シンポジウムや地域の人々との対談、ワークショップなどの活動も実施される。例えばそれは、紀南とアートのみならず文化や風俗に関する様々なシンポジウムやオンラインでのトークセッションであり、農業や観光